

「今、伝えたいこと」

平成23年度 気仙沼市立階上中学校 3年生 菊田 佳那

私が今、伝えたいこと。それは、今まで支えてくれた家族、先生や友達、支援して下さった多くの方々への感謝の気持ちです。人は一人では生きられないことを痛感しました。

あの日も、いつもと変わらない平凡な日々を送れると思っていました。「いってらっしゃい。」という、祖母の声を後にして家を出ると、外では祖父が忙しそうに働いていたのを今でも覚えています。何にでも厳しく、いつも喧嘩してばかりいた祖母。多くを語らない、働き者の祖父。私は、そんな祖父母が大好きでした。テストの結果が良かった時、学校や習い事から賞状を貰ってくる度に、人一倍喜んでくれた祖父母。そんな祖父母の喜ぶ顔が見たくて、いつしか一生懸命物事に取り組むようになっていました。

3月11日、午後2時46分。地震発生時、私は学校の体育館にいました。明日に控えた卒業式の準備をしていたところに、それはやってきました。まるで、獣が地下深くから叫んでいるような、大きな地鳴りを聞きました。只事ではないと思った時には、既に激しい縦揺れと横揺れに襲われていました。今まで体験したことのない激しい揺れに状況がつかめず、パニックに陥っていた私たち。「早く、いすの下に潜れ。」と叫ぶ先生の声聞き、急いで頭を潜らせました。いつまでも止まない激しい揺れ。皆の叫び声や泣き声。今にも落ちてきそうな、バスケットゴール。私は迫りくる「死」の恐怖におびえながら、早くおさまると、ただただ祈ることしか出来ませんでした。

その後、揺れがおさまると体育館前の駐車場へ避難すると同時に、たくさんの方が避難して来ました。その時、私の脳裏をよぎったのは祖父母が無事に避難しているか、ということでした。今思えば、あの時私が家まで走っていけば、祖父母を助けることが出来たかもしれない。津波の犠牲にならなくて済んだかもしれない、と後悔しています。幸せだったそれまでの日々。祖父母の喜ぶ顔を見ることも、14年間過ごした家のドアを開けることも、今ではもう出来ません。私は、愛する家族を失い、我がふるさとを失い、明日への希望も失いかけていました。

そんな時、一筋の光がさし込んできました。自衛隊の方々、避難所に到着したのです。それからは、炊き出しやがれきの撤去がスムーズに進んでいき、復興への兆しも見えてきました。また、多くの方が支援物資を送って下さったり、義援金をくださったりと、感謝しきれない思いでした。私は、失ったものは沢山あったけれど、そこから学んだこと、それを通じて感じたことなど、ただ失っただけではなかったのだと、後から思いました。

4月下旬、待ちに待った始業式。友達との久々の再会を喜びつつも、友達の中にも家や家族を失った人たちがいて、嬉しいような、悲しいような戸惑いの中で学校生活を送っていました。そんな中で、部活を再びできたことが何より幸せでした。決して満足のいく練習ではありませんでしたが、顧問の先生をはじめ、家族の皆に恩返しをしたい一心で頑張りました。その結果、県大会へ出場し、1回戦を勝つことが出来ました。賞状を家に持ち帰り、写真の中の祖父母に見せました。笑っているだけで、何も喋らない祖父母。それでも「おめでとう」と言っている気がしました。手が届かない所に行ってしまったけれど、いつまでも見守ってくれると思います。

「困った時は、頼ってくれていいんだよ。」と言ってくれた友達。ご自分も被災されておられるのに、私たちを一番に考えて下さった先生方。救援活動が終了し、この地を去る前に開いて下さった演奏会の中で「君たちは、日本の宝だ。もう誰も死ぬな。」と、涙ながらに励ましてく

ださった自衛隊の皆さんをはじめとする、支援してくださった多くの方々。そして、いつもそばで支えてくれた家族。本当に、ありがとうございます。少しずつではありますが、今、自分に来ることを精いっぱいやり、復興へ向けて歩いていこうと思います。

震災直後に取材に来た海外のメディアが、「気仙沼には、もう人は住めないと思うがどうですか。」と先生に尋ねたそうです。ですが、先生は「この生徒たちが、必ず元の美しい気仙沼に戻します。私たち大人はそれを全力で支援します。」と伝えたとの話を聞き「私たちは期待されている。その信頼に応えられるよう、頑張って生きていこう。」と思いました。「神様は、その人に耐えられない試練は与えない」と言います。この震災で本当に大切なものは、人と支え合うことと、希望を捨てずに前へ進むことだと、私は思います。